

読書週間（学芸会とおすすめの本）

2018. 11. 19

11月10日の学芸会では、どの学年も素晴らしい劇を見せてくれました。うまくいかなかったところがあったり、もっとうまくできたのに・・・とったりした人もいるかもしれませんが、だれもが一生懸命だったこと、見ている人に感動を与えられたことが素晴らしかったです。私は、「みんなで力を合わせることができ学年全体でまとまったことがまた一つ思い出になった。」という6年生の言葉がとてもうれしかったです。他の学年からも、「緊張したけれど伝えたいことを伝えられたと思う。」「動作とかを考えた。」「お客さんによく聞こえるようにはっきりと台詞を言った。」「他の学年の劇も全部素晴らしかった。」などの感想が聞かれました。

見に来てくださっていた地域の方々やお家の人からも「よかった！」「かわいかった」「自分の役を大好きだと思っている気持ちが伝わってきた」「一人一人が役割を果たしていた」「言葉や動作がはっきりとしていて、伝えたいという気持ちをたくさん感じた」「劇団の人やブロードウェイのミュージカルに出演している人たちよりもすごいと思った」「帰り道に劇の中の歌がずっと頭の中で響いていた」「学芸会が毎年あったらいいのに」などの言葉をいただきました。おうちでもきっとほめてもらったと思います。誉めていただいたことや自分が頑張ったこと、みんなで力を合わせたことなどを忘れずに、学芸会以外の場面でも頑張ってください。

さて、この間、学芸会の前に読書週間がありました。読書週間は終わったのですが、本を読むことはとても楽しいです。私はハッピーになれるお話が好きなのですが、今日は、読みながらいろいろなことを考えさせられた本を紹介します。

アメリカのコネチカット州で生まれてニューヨークの図書館で働いていたエレナー・エスティスさんの書いた「百枚のドレス」という本です。主人公は、アメリカの小学生、大人しくて大きな声で話をするのらないワンダという女の子です。同じクラスには、お金持ちで髪の毛がくりくりとカールしているきれいなペギーやペギーと仲良しのマデラインやトマスやスミスやアレンがいます。ワンダは学校にはいつも青いワンピースで来ています。ある日、ペギーがワンダに「あなたはドレスを何枚持っているのかしら。」と聞くと、ワンダは「あたしの家の戸棚の中には百枚のドレスがずらっと並んでいる。」と答えます。「絹やビロードのものもある。」と言います。でも、みんなは嘘に決まっていると思ってバカにしたようにキャアキャア笑ってしまいました。ペギーもマデラインもです。ペギーやマデラインは別に意地悪な子でなくて、小さい子がいじめられていたらかばってあげるような子なのですが、いくらなんでもワンダが百枚もドレスを持っているわけがないと思い「なんでそんな嘘を言うのか分からない。」と考えていました。マデラインは、それでもみんながワンダのことを笑うのはよくないと思い、算数のかけ算九九の8の段の勉強をした後、ペギーに手紙を書くのですが渡す勇気がありませんでした。ペギーは絵を描くのも上手でした。ですから、学校の全員が参加するデザイン画コンクールで賞をもらうのはペギーだとみんなが思っていたのですが、一等賞をとったのはワンダでした。ワンダが描いたのは百枚のドレスでした。どれもデザインが違って、百枚が百枚とも素晴らしいと審査員の先生たちが思ったそうです。

ところが、ワンダは引越しをして転校してしまったので、みんなでお祝いをすることはできませんでした。マデラインはペギーと一緒にワンダが住んでいた家に行ってみましたが、もう誰もいませんでした。新しい住所は分からなかったのですが、古い住所で手紙の宛名を書いて転送してくださいと書いておけば、新しい住所の家に届くのではないかと思い、2人はワンダに手紙を書きます。ワンダの絵がとってもきれいだったこと、コンクールで1等賞だったことなどです。何週間待っても返事は来ませんでした。でも、とうとうクリスマスパーティの日にワンダから返事が来ました。「新しい家の戸棚にも、新しい百枚のドレスがあるから、コンクールに出した百枚のドレスはみんなにあげます。ペギーには緑のドレス、マデラインには青いドレスをあげてください。」そう書かれていました。

同じ本でも、読む人の年齢や読んだ時の心の状態で感じ方が違うことは、本のおもしろさの1つかもありません。みなさんの今のおすすめの本は、なんという本ですか。それは、どうしておすすめの本ですか。今度、是非、教えてください。